

オールド・リベラリストと日蓮信仰 —大正期におけるリベラリストと立正安国—

大 西 克 明

Old Liberalist and Nichiren Buddhism :
Liberalists and Risshō-ankoku in the Taisho Period

OHNISHI Katsuaki

キーワード：石橋湛山、山田三良、リベラリスト、日蓮信仰、立正安国

要約

大正デモクラシー期において、自由主義的価値観を共有する知識人（オールド・リベラリスト）は日蓮思想をどのように受容し、信仰者としていかなる発言をしていたのであろうか。本稿は、石橋湛山と山田三良（法華会創設者の一人）の言説を検討するものである。近代日本における日蓮思想の研究は、国体論的日蓮主義を代表的事例として検討されてきた。しかし、広義の近代日蓮思想を把握するには、明治憲法の枠の中で自由主義的価値を堅守しようとする日蓮信仰者の検討を欠くわけにはいかない。石橋湛山は言論の自由との関係で日蓮思想を受容して、自らの行動規範の核とし、リベラリストとしての信念と日蓮思想が内的に結合した愛国の精神に行き着いた。山田三良は宗教を選択できる自由を確保した上で、日蓮信仰を介した教育家の精神

修養こそが、間接的に国を栄えさせていくとする立正安国のビジョンを持った。両者はともに日蓮思想を自己の信念としつつ、同時にリベラルな価値を堅守していこうとするところで共通していた。さらに日蓮思想に顕著な向社会的性(立正安国)を捨て去ることともなかった。

1. はじめに

1-1. 問題設定

近代日本の日蓮信仰をいかなる視角で分析すべきかについて、各種の視点がこれまでに提起されてきたが、田村芳朗による類型は特に参照されてきたものである。田村は広義の日蓮主義を以下のように類別している。すなわち、(1) 国家主義的な日蓮信奉、(2) 国家を超越した普遍の日蓮信奉(法華経を通しての宇宙実相への信仰)、(3) 新宗教運動における日蓮信奉である。彼は、(1)の事例として、田中智学、本多日生、井上日召、石原莞爾、北一輝を挙げ、(2)には高山樗牛、宮沢賢治、尾崎秀実、妹尾義郎を、(3)では佛立講、霊友会、創価学会を例示した¹。この類別は近代日本における日蓮信仰を「国家・脱国家・民衆」という三局面において把握することを可能とし、1970年代以降の日蓮主義研究において広く共有された視角だったといえよう。しかし、田村の視点は静的な類型であり、より動的な把握を目指そうとする視点が存在する。その嚆矢となるのは西山茂の研究であり、それは日蓮信仰の質と日本国民としての同一性との葛藤を、実証的かつ動態的に把握しようとするものであった。

西山は、「日蓮信者としてのアイデンティティと天皇の臣民としてのアイデンティティを、しかも両者の間に矛盾のないかたちで獲得することを模索する営み」として日蓮主義思想を捉えた²。それは、「日蓮」と「日本」の間にあ

1 田村芳朗「近代日本の歩みと日蓮主義」田村芳朗・宮崎英修編『講座日蓮4 近代日本と日蓮主義』春秋社、1972年。

2 西山茂「日本の近現代における国体論的日蓮主義の展開」『東洋大学社会学部紀要』

る本来的な緊張関係に着目し、両者における葛藤や相克を積極的に主題化したものであった。これは田村の類別における「国家主義的な日蓮信仰」と「国家超越的な日蓮信仰」を理念型として見立てた上で、動的に把握していることとする視点でもあった。つまり、日蓮信者であることと日本臣民であることの統一は如何にして可能か、ということが深刻に問われる状況下での思想の顕現として、近代日蓮思想の特徴を剔抉しようとしたのである。そして、今日の近代日蓮主義研究は西山が提起した視点を前提に進められている³。

本稿は、西山が提起した、日蓮信者であることと日本臣民であることの拮抗関係を踏まえた上で、それを国家主義や脱国家主義の二分法に矮小化させるのではなく、両者の中で揺れ動く思想的営みに対して焦点を当ててみたい。これまで、日蓮信仰と日本臣民であることの矛盾を突破する思想として、田中智学に代表される国体論の日蓮主義への着目がなされてきたが、それとは異なる「リベラル（自由主義）」な立場をとる日蓮信者（法華信仰者）の思想的格闘は、十分に検討されてきたとは言い難い。本稿が対象とする時期は大正期となるが、ここでいうリベラルは明治憲法体制下におけるそれであり、後述するように「オールド・リベラル」であった。しかし、リベラルな思潮を背景に持ちつつ、同時に日蓮思想（特に立正安国思想）を主張するという思想的格闘もまた、近代日蓮思想の重要な側面であり、それを検討することは、近代日蓮思想の全体像を理解する上で欠かせないことであると思われる。

本稿は、「明治国家体制において立正安国は如何にして可能であるか」という問いに直面したリベラリストの思想を取りあげる。具体的には、石橋湛山（1884-1973）と山田三良（1869-1965）を事例とする。両者はともに明治後期から大正期以降に言論活動を活発化させており、各種のリベラリズムの影響を受けていることが共通する。さらに同時に日蓮信者として自らの思想を言論

第22号、169頁、1985年。

3 西山茂の問題関心を継承し日蓮主義研究を進めた研究書として、大谷栄一『日蓮主義とは何だったのか』講談社、2019年、がある。なお、大谷が研究対象としたのは、田中智学、本多日生、高山樗牛、妹尾義郎、石原莞爾、宮沢賢治、井上日召であった。

として表明していた。そこには、田村が提起した三つの類別の枠に必ずしも収まりきらない思想の特徴があるように思われる。

1-2. 「オールド・リベラリスト」の言説

「オールド・リベラル(リベラリスト)」という用語は、戦後の政治学者・思想家が戦前の自由主義者に対して、戦後民主化を妨げる保守性を揶揄する文脈で誕生し、政治的社会的変革における不徹底さを指摘するものであった。大内兵衛(1888-1980)がマルクス主義の立場から戦前の自由主義を批判する際に用いたのが嚆矢とされる⁴。しかし、本稿では、その不徹底さを言挙げするのではなく、むしろ、明治憲法体制下においてリベラルであることにこだわった思想として注目し、さらに同時に日蓮信者として自己を定位する思想的営みに着目したい。言い換えれば、国民(臣民)であること、リベラリストであること、さらに日蓮信者であるという三局面の相克に焦点を合わせるのである。よって本稿では、戦後のリベラルを含む広義のリベラリズムと区別する意味で、大正期のそれをオールド・リベラリズムとして見ていきたい。

では、大正期のリベラリズムを特徴付けるものとは何であろうか。ここではそれを、美濃部達吉(1873-1948)の天皇機関説、及び吉野作造(1878-1933)の民本主義に代表される「大正デモクラシー期(桂園時代から5・15事件)」の自由主義的価値観を共有する一群の思想と概括しておきたい。確かにそれは丸山眞男のいう「重臣リベラリズム」ではあった。しかし、明治憲法に内在していた自由主義の価値を、極限にまで突き詰めた思想としてみるならば、その思想的格闘を理解することは、大正期における日蓮信仰の地場を考察する上で必要な前提条件の考察になるであろう。

さらに1935年の天皇機関説事件(国体明徴運動)以降、美濃部や吉野の民主化理論が国体を破壊するものと非難されたことを考えると、既存の体制を漸進的に改良していく批判精神がオールド・リベラリストに存在していたこ

4 大内兵衛「オールド・リベラリストの形成」『中央公論』1949年7月号、31-37頁。

とは確かであろう。すなわち、それらの思想を概括すれば、明治憲法の枠の中で自由主義を深めるもので、「君民同治」を前提に、議会制（代議制）や政党政治こそが民意（民本）であり、それを目指すべきとする思潮といえる。

今日では、美濃部や吉野の思想は、軍と結びついた政党（政友会）によって影響力が終焉し、その思想は敗北したとされ、さらに、彼らに内在していた民衆への軽視が敗北要因であったと評されている⁵。しかし、リベラルな思想は議会制や政党政治という政治過程に限定されるものではないだろう。例えば、経済や思想信条、教育の自由などもその一環である。むしろ本稿で着目しているのは、大正デモクラシー期の日蓮信仰者の言説に、政治過程に留まらず、どの程度リベラリズムが浸透しているかであり、その地点から、いかなる理路で日蓮思想が解釈されているかにある。

2. 石橋湛山の日蓮受容

2-1. 石橋湛山研究と日蓮

近年、特に2000年代以降における石橋湛山研究において、彼の日蓮信仰への着目が目立っている。1970年以降、石橋湛山全集（全15巻、東洋経済新報社）が刊行されたことで、政治思想の領域では石橋におけるリベラリズムの質（特に小日本主義の内容）について研究が進んできた。しかし、石橋の宗教観についての論究は比較的新しい取り組みといえよう。

石橋湛山は、杉田日布（1855-1930、身延山久遠寺第81世法主）の第一子として誕生し、その後、望月日謙（1865-1943、身延山久遠寺第83世法主）に預けられ、中学時代に得度している。その後、早稲田大学文学科（及び大学院）を卒業後、東京毎日新聞社を経て1911年に東洋経済新報社に入社し、ジャーナリストとして活動を始めた。彼の幼少期から高等予科時代における宗教環境については、渡辺宝陽の研究に詳しい。渡辺は、湛山の父である日布と預

5 古川江里子『美濃部達吉と吉野作造』山川出版社、87-89頁、2011年。

け先の日謙が近代的感覚を有していたこと、並びに中学校（山梨県立第一中学校）での自由主義的・個人主義的な教育が、その後の湛山の思想形成の背景となったことを指摘した⁶。さらに予科時代の1年間、茗谷学園に寄宿したことから生じた日蓮宗大学の学生との交流も、湛山の日蓮信仰に影響を与えたと指摘している⁷。また、青年期に田中王堂（1868-1932）から受容したプラグマティズム、「欲望統整」の哲学の影響も無視できない⁸。加えて、東洋経済新報社から継承した「小日本主義」の思想や、経済リベラル（功利主義）の思想も石橋湛山の思想を理解する上で考慮すべき点である⁹。

自由主義ジャーナリストとしての石橋湛山研究は、彼の政治思想や社会経済観、植民地放棄論などが着目されてきた¹⁰。その多彩な側面を統合しつつ理解していくのが、石橋湛山研究の現状であろう。このことから、近年、湛山の思想の核としての宗教観が着目されているように思われる¹¹。

では、石橋湛山は日蓮をどのように受容したのであろうか。戸田教敏は、湛山は「人間生活における実効性を重視する、プラグマティックな宗教観」から日蓮を受容したと論じている。つまり、日蓮思想を倫理的教訓として解釈し、現実問題に即して解釈する姿である。そして湛山は、日蓮こそが自由

6 渡辺宝陽「石橋湛山の宗教観の一端と法縁の周辺」『自由思想』第38号、41頁、1986年。

7 渡辺宝陽「石橋湛山の宗教観の一端と法縁の周辺（続）」『自由思想』第40号、42-46頁、1986年。

8 姜克實『石橋湛山』吉川弘文館、10-33頁、2014年。

9 東洋経済新報社の小日本主義については、井上清・渡部徹編『大正期の急進的自由主義』東洋経済新報社、1972年、を参照。

10 この分野における近年の成果は増田弘『石橋湛山』ミネルヴァ書房、2017年、を参照。

11 この点に言及しているものとして、望月哲也「石橋湛山の立正安国」『国際宗教研究所ニュースレター』第64号、33頁、2009年、がある。ここで望月は、石橋湛山を「世俗的なりベラリストとしてのみ論ずることは、その重要な本質を見逃すことになるだろう」と述べ、湛山における宗教的信念を研究する必要性を提起した。

主義者であったと考えていたのではないか、との視点を提起した¹²。また、石川公彌子は、湛山は田中智学の日蓮主義とは距離をとり、むしろ批判的な立場であったのではないかと論じている¹³。つまり、石橋の宗教観には非合理性や狂信を排除する合理的思考が基底として存在し、日蓮解釈もリベラルな背景から理解されていたとするのである。さらに、松井慎一郎は、言論統制の難局にあった際に、湛山が日蓮思想を主体的に実践し、法華経の行者としての使命に鼓舞されていたのではないかと推論し、湛山が目指したのは、日蓮の精神を現代に応用することであると指摘した¹⁴。

そして、望月詩史は、湛山における愛国心と日蓮の関係について論じている。つまり、権力に迎合しない日蓮の姿勢こそが、真の愛国心の顕現であると考え、日蓮の「日本の柱」（開目抄）という自覚に、湛山自身が共振していたとするのである¹⁵。

上記のように、石橋湛山の宗教観や日蓮思想の受容の在り方について、多様な解釈がなされているが、共通していえることは、リベラリストとしての石橋湛山と、日蓮信仰者としての石橋湛山が、思想の内部で関連しているということである。

2-2. リベラリスト石橋湛山と日蓮

では、それはどのように関連していたのであろうか。そこで注目されるのは、オールド・リベラリストとしての国家観であろう。石橋の愛国心は国体論的日蓮主義の愛国心とは異なり、言論の自由が担保された状態こそが、愛するに値する国であるとする姿勢が存在していたと考えることができる。石

12 戸田教敏「石橋湛山の宗教観と自由主義の日蓮観」『石橋湛山研究』第5号、127頁、2023年。

13 石川公彌子「『立正安国』とデモクラシー」『立正大学法制研究所研究年報』第14号、9-12頁、2009年。

14 松井慎一郎「石橋湛山と日蓮仏教」『石橋湛山研究』第3号、79頁、2020年。

15 望月詩史『石橋湛山の〈問い〉—日本の針路をめぐって』法律文化社、26-32頁、2020年。

橋が最も引用する日蓮遺文は、「開目抄」の以下の文であった。

「智者に我義やぶられずば用いじとなり、其の外の大難・風の前の塵なるべし、我日本の柱とならむ我日本の眼目とならむ我日本の大船とならむ等とちかいし願やぶるべからず。¹⁶」

石橋は、合理的な討論を重視したが、その際「智者に我義やぶられずば」との遺文を引用し、言論人としての自らの立場を鮮明にするのである。これは、大正デモクラシー期におけるオールド・リベラリストの思潮と親和性を持つものであったといえよう。議会制や政党政治を目指すそれらの運動に対し、石橋はそれらを肯定しつつ、さらに日蓮思想によって自らの立場を固めていったと考えることができる。

同時に、オールド・リベラリストが、皇室は道徳的に尊崇すべきものと評価していたことも考慮に入れるべきだろう。「我日本の柱とならむ」との遺文を引用するとき、彼にとっての愛すべき「日本」は小日本主義のそれであり、非侵略的態度による国際社会での信頼獲得に尽力することが、愛国精神として昇華されていたと考えられる。

石橋湛山は宗教運動には関与しなかった。それゆえに、彼は日蓮主義者であるとの評価がなされてこなかった。しかし、それは日蓮主義の定義に関わる問題を含んでいる。従来、日蓮主義あるいは日蓮主義者とは、立正安国を目指すための運動体（運動主体者）として理解されてきた。さらに、リベリズムとは相容れない宗教運動として理解されてきたように思われる。これは広義の意味での近代日蓮思想からみれば、狭義の意味での近代日蓮思想である。

石橋湛山の思想は、言論自由というリベラル社会を目指す者にとって、日蓮思想の受容の在り方の一つとして捉えることが可能だろう。それは、リベ

16 立正大学日蓮教学研究所『昭和定本 日蓮聖人遺文（第1巻）』身延山久遠寺、601頁。

ラル社会においていかに立正安国を達成させるかという「可能性への問い」であった。言論人であることと愛国者であること。この両者を矛盾なく統一させる存在として、石橋の前に日蓮が出現したといっても良いだろう。

石橋は、宗学で説かれるところの戒壇論についてのビジョンは持ち合わせていなかった。また、仏教系新宗教が説く現世利益・現証利益について積極的に語ることはなかった。つまり、石橋湛山は、国家主義的な日蓮信仰や、脱国家的な日蓮信仰者、さらには新宗教とも関わらない日蓮信仰者として、近代日本に現れた人物であったといえるだろう。

3. 山田三良の日蓮受容

3-1. 山田三良と法華会

山田三良は法華会の創設者の一人として著名であるが、彼の思想について論じたものは数少ない¹⁷。先行研究は、渡辺宝陽による山田の入信経緯を紹介したもの¹⁸、及び浜島典彦による法華会創設時における山田の役割について触れているものに留まる¹⁹。では、なぜ本稿は山田三良に着目するのか。それは、山田が日蓮主義運動の中核メンバーであったにもかかわらず、リベラルな思潮に馴染んでおり、彼が創設した法華会の機関誌『法華』の内容にも、そのような論調が散見されるからである²⁰。なお、山田自身の回顧録が雑誌『法

17 山田三良は国際私法学者として多くの論文を執筆しているが、本稿では日蓮信仰者としての山田に焦点を合わせるため考察の範囲から除いた。

18 渡辺宝陽「法華会の歴史を顧みる（第1回）山田三良先生の『法華経開眼』」『法華』109(8)、2023年。

19 浜島典彦「近代における在家日蓮主義運動の一考察—小林一郎と山田三良を中心として」高木豊・冠賢一編『日蓮とその教団』吉川弘文館、1999年。

20 法華会の創設者の一人である小林一郎の思想内容については、拙論「近代における在家知識人の法華経解釈—法華会・小林一郎の事例」『東洋学研究』第58号、2021年、を参照。また、法華会自体の思想傾向についての分析は、拙論「法華会の思想と展開—戦前の動向を通して」『創価大学人文論集』第35号、2023年、を参照。

華』に掲載されており、以下の叙述で参考とした²¹。

山田三良は、本多日生(1867-1931)が創始展開した天晴会に縁することで、36歳頃に日蓮信仰に入った。その当時、すでに東京帝国大学法科大学教授(国際私法講座)であった²²。本多日生は宗門統一や仏教統一、さらには宗教間の協力に関心を持っており、そのために社会的人脈が多彩で、人脈を活かした天晴会(知識人中心の日蓮信仰者のネットワーク)を結成した。山田は本多の講演に影響を受け、さらに配偶者が日蓮信仰者であったことから入信したのであった。

その後、天晴会は自然消滅することになるが、その過程で山田は小林一郎、矢野茂とともに、法華会を1914年に創設し、初代理事長として活動していく。

法華会は在家の日蓮信仰者を中心としたもので、『法華』を購読したものが会員となり、講演会や各地域での日蓮思想の学習会を軸とした運動体であり、最盛期には会員が四千名程度であったとされる。『法華』には実に多様な論説が掲載され、国体論的日蓮主義の内容もあれば、オールド・リベラルな思潮も掲載されていた。しかし、山田は国体論的日蓮主義を説くことはなく、リベラルな立場から論陣を張っていた。以下では、法華会全体の思想傾向ではなく、山田三良個人の思想を検討していきたい。

3-2. 精神修養としての日蓮信仰

山田の論説で通奏低音となるのが、日蓮信仰を基盤とした精神修養を主張しているところである。彼は、科学文明批判をおこない、「生命現象」を解き明かした日蓮仏教によって人格向上の精神修養が可能となると力説する。

21 山田三良「私の歩んだ道」『法華』41(4)、1954年。山田三良「法華経のよろこび」久保田正文『法華経入門』日新出版、1966年。なお、『法華』52(4)、1966年、は山田三良先生追悼号として編纂され、年譜と共に追悼文(安倍能成、田中耕太郎、南原繁、堀一郎等)が寄せられており参考となる。

22 なお、山田三良は後に日本学士院院長(1949-1961)を務めた。

「自他共に修養し、以て完全なる人格を養い、以て成佛得脱の上久遠の理想に生きようではありませんか。²³」

「靈妙不可思議の生命の説明、及び人生の帰趣はどうしても宗教的精神修養の力に因って初めて解決されるのである。²⁴」

このように、日蓮信仰は第一義的には人格完成に向けた修養として把握される。そして、精神修養の拡がりにおいて日蓮主義の拡大を捉えている。例えば、米国における排日問題を評する論において、「在留同胞が此精神により此覚悟により米人を教化する事によって必ずや解決の曙光は認められ得べきを確信する者である²⁵」と述べ、精神修養の広がりには国外へも及ぶことを主張している²⁶。明治中期以降に修養書が流行していることから考えると、精神修養を主とした論調自体に特質があったとは言えないだろう。しかし、山田三良は、精神修養を基盤にしつつも、同時に立正安国について語っていくのである。

3-3. 「宗教と国家」「宗教と教育」

山田三良が立正安国について論説する際、着目すべきは、宗教と国家及び教育の関係をどのように捉えているかである。国体論の日蓮主義では、国家と宗教（日蓮思想）は「冥合」すべきものとされ、冥合できていない壁をどのように打ち破っていくかが思想的な目的とされる。逆を言えば、宗教と国家は厳格に分離すべきとの発想を有していなかったといえるだろう。しかし山田は、近代社会においては宗教と国家は分離すべきだとの前提に立って論を

23 山田三良「精神修養と宗教」『日本警察新聞』第378号（9月1日）、17頁、1916年。
なお、引用にあたって旧字体を新字体に改めた（以下同様）。

24 同上。

25 山田三良「日本国民一致して世界を指導し、日蓮主義を徹底せしめて濟世の実を挙げよ」『法華』6(10)、67頁、1919年。

26 ただし、『法華』の編集には政局を論じないという方針が存在したので、山田は対外政策について具体的に論じることはなかった。

進めていく。

一方、明治憲法の枠の中で信教の自由を深めようとする立場は、山田にとって自明なことであった。山田は、「信教の自由を与え給いし明治大帝の偉業²⁷」を賛美し、明治憲法においてすでに信教の自由は与えられていると解しているのである。山田は明治憲法の枠の中で信教の自由を深めていく理路を有していた。この意味で山田はオールド・リベラルの思潮のなかにいたと
いって良いだろう。彼は以下のように論じている。

「人智の開発するに従い国家も亦国家本来の力に信頼し必ずしも特定の宗教の力によって国民の団結を強固ならしむる必要のないことを悟るに至った。本来立場を異にする政治と宗教とが互いに相分離して其各の持場に帰るのは蓋し自然の勢であらう。²⁸」

「吾人は紅紫咲き乱れたる思想の花園に入って自由に、恣に其好める一つを選ぶべく許されて居るでは無いか。²⁹」

政治(国家)と宗教が分離してこそ、各々が主体的に宗教を選択できることを賛美しつつ、宗教を取捨選択できる自由を肯定している。もっとも山田には、日蓮思想が高邁な思想であるとの自負があり、日蓮思想を以って国民を精神的に感化させていくことが目的であることは崩さない。では、山田にとっての立正安国とは何であったのか。彼は「法国冥合」や「王仏冥合」などの語は一才用いない。信教の自由が担保された状態で、彼が目指した立正安国とは、教育改革を媒介とした漸進的な改良であった。

彼は、宗教と国家の関係と同様に、宗教と教育も分離すべきとの立場をとる。その上で、教育家(教育者)が、正しき宗教を会得することで、結果とし

27 山田三良「宗教と国家及び政治(上)」『法華』1(7)、45頁、1914年。

28 同上、47頁。

29 同上、52頁。

て国全体が榮えていくという主張をおこなう。

「学校に於いては宗教を宗教として教ゆるの必要はない。教育家は唯如何なる宗教をも排斥し来りたる従来の弊習を蟬脱して自ら正しき宗教を体得し、青年学生をして宗教に就いて自ら考へ之を批判して真の自覚に到達する様に指導すれば善いのである。³⁰」

「我国に於ける教育勅語の如きも実に立派なものであるけれどもいくら夫を暗誦しても教育者自身すら実行が困難では無いか。³¹」

山田は、学校教育において宗教を教えるべきではないとしている。それは、学生が主体的に信仰を会得する弊害にもなると主張しているのである。一方で、教育家へは旧習を脱した「正しき宗教」を体得し、宗教について深く考えさせるのが重要であると訴える。教育勅語を實踐できていない有様を嘆いているところからも、彼の教育に掛ける熱意が伝わってくるであろう。

彼にとって、日蓮思想の拡がりとは、教育家自身の精神修養によってなされ、しかも教育家が教授すべきものではなく、感化させていくものだった。その背景には、山田の日蓮信仰への自負が看取されると同時に、リベラルな立場を堅守するという側面も観察される。

日蓮信仰に基づく精神修養が、結果として立正安国につながるという信念と理路を持ち合わせていた山田は、法華会の初代理事長として論陣を張っていく。法華会の思想内容において全体的に修養性が強かったのは、山田三良自身の信教の自由を認めるリベラルな立場が反映されていたと考えることができよう。

明治憲法体制下において自由主義を深めていく立場は、「言論の自由」や「信教の自由」を堅守していくベクトルを有していた。石橋湛山は言論自由に、

30 山田三良「宗教と教育(下)」『法華』1(2)、36頁、1914年。

31 山田三良「精神宗教と宗教」『日本警察新聞』第387号(12月1日)、1916年、17頁。

山田三良は信教自由を深めていく立場になったが、両者共に日蓮思想を独自に理解し、明治憲法という制約がありつつも、近代社会における立正安国の可能性に自らの人生を捧げた人物であったといえるだろう。

3-4. 敗戦後の山田三良について

敗戦後の1947年、山田は「民主政治と立正安国」との論題を発表し、日蓮における国主諫暁を言論自由の文脈で解釈している。言論の自由や信教の自由を日蓮の行動に擬えて理解するのは、敗戦によって生成したものではない。1914年の法華会創設当初から主張されていた論点の延長であり、一貫性が認められる。

「言論の自由も、信仰の自由をも認めざる当時に於いて、正法の為に黙視するに忍びすと為し、身命を賭して敢行せられたる第一回の国家諫暁であった。³²」

言論・信教の自由は戦い取るものであることを日蓮の行動を通して解釈し、言論・信教自由を堅守することこそが、日蓮信仰者としての努めであるとする視点である。しかし、大正期の主張と微妙なズレも感じさせる。それは、明治大帝が与えてくれた信教自由という前提が取り払われたところである。敗戦後の文章からは恩寵的な信教自由の意識は消え去っている。新憲法の下で保証された信教自由は、彼にはどのように映ったのであろうか。少なくとも、言論・信教の自由を堅守すべきだという意識が連続していたことは確かであろう。

大正期におけるリベラリズムは新憲法下において「オールド」と評されるのは確かである。だが、時代社会の拘束を受けながらも、言論・信教の自由を堅守する立場から立正安国についての思索を巡らせた思想的営為は、近代

32 山田三良「民主政治と立正安国」『法華』34(2)、10頁、1947年。

日蓮信仰者の一つの存在形態を示しているのではかなろうか。

4. 結語

本稿では、オールド・リベラリストがどのように日蓮を信仰し、かつ立正安国への構想を保持していたのかについて、石橋湛山と山田三良を事例として論じてきた。両者に共通するのは、明治憲法体制下においてリベラルな価値を墨守していこうとする姿勢であった。そして同時に、日蓮信仰者として信念を主張し、向社会性を失わないところであった。ここで、両者の異同についてまとめておきたい。

(1) まず、両者ともに、自由主義の深化を自己の信念としていることが挙げられる。石橋湛山は日蓮遺文を言論自由を守る立場から読み解き、宗教的信念の核に据えていた。山田三良は、信教自由が時代の趨勢であるとの信念から、それを前提とした立正安国運動を展開し、修養主義を通して達成しようとする方針を取った。

(2) 次に、両者ともに、国体論的日蓮主義やそれを背景とした世界統一予言からは距離を取り、合理的思惟から日蓮の思想を解釈していた。それは石橋の場合、徹底した討論の肯定として現れた。山田の場合は、西洋哲学思想を交えた生命主義の視点から日蓮思想を捉え、人格向上のための信仰として顕現していった。

(3) また、両者ともに、リベラルでありつつも、皇室尊崇、愛国の立場を有していた。愛国者であること、リベラルであること、そして日蓮信仰者であることの三つの側面を、石橋と山田は立場が違えども、探究していったのである。

本稿では、近代日蓮思想をより広義に捉えるために、石橋と山田を検討した。それは、近代日本における立正安国運動の研究において、国体論的日蓮主義が代表的事例とされている研究状況に対し一石を投じる意味もあった。

本稿で主題化したリベラル思想と日蓮思想の連関性についての知見を活用しつつ、近代における日蓮思想の顕現について、総合的に研究してることが

(124)

今後の課題といえよう。

・付記

本稿は、日本宗教学会第82回学術大会(2022年9月)で発表した内容を加筆修正したものである。